

## 福島体験記 防府教会 竹添 民

去る3月29日から4月2日までの5日間、私にとって3回目の東北ボランティアに行ってきました。私が実際に行って経験した貴重な体験を伝えたいと思います。今回の目的地は福島の南相馬市でした。

到着した翌日、車で様々な所を視察しながら放射線などの知識を教えてくださいました。特別はっきり分かる境界線もないのに「ここから居住制限地域です」と言われ、昨日までと何の変わりもない故郷から立ち退きを強要された人達のことを考えました。また、以前ボランティアに行った、津波の被害が酷かった岩手では復興が進んでいるのに対し、新聞やテレビなどで聞き流してしまっていた「復興はまだまだだ」という言葉を福島に来て初めて肌で感じました。

3・4日目は現地の方の庭の竹を切り倒し、枝打ちをして袋に詰めるという作業をしました。今までの東北ボランティアでは感じる事ができなかった「目に見える形で直接力になることができた」という気持ちのいい汗と達成感。また作業中に「あー私今生きてるなあ！」と実感したり、自分で握ったおにぎりを出してもらったお味噌汁がどんなご馳走よりも美味しく感じたりと、普段気づくことができない「幸せ」に満たされました。2日間を通じて20人弱のメンバーで約25トンもの汚染された竹や木々を集めました。運んだ先の集積所では先が見えないぐらい同じ袋が敷き詰められてあり、この作業が果てしなく必要な状態で人手がもっと必要だなと実感しました。

「当初1週間で戻れる」と言われた故郷から追い出されて6年。この春やっと開通した電車。定時になると鳴り響く、土地からの退出を命じるアナウンス。それらがすべて当たり前になってしまっている、フクシマ。

その「あたりまえ」を少しでも変えることができる人間になりたい。そう思った時に今まで見えなかった私の夢の選択肢が増えました。

現地の人達が生き抜くために学んだこと、それは「目の前に悪いことがあってもそのずっと先のゴールのために頑張る」

この幸運を授けてくださった神様、連れて行ってくれた方々、驚くほど暖かい雰囲気でも迎えてくれたベースの方々に本当に感謝しています。

受験頑張って絶対またここに帰ってきたいと思います！！！！

## 福島での体験 防府教会 尾中 真希

福島での活動は、視察を含め3日間という短い期間でした。今回は休憩時間や車での移動中に、活動や活動を通じて気がついたこと、感じたことをメモしました。

行く先々であった方々や、スタッフさんが地震があった日や、それ以降の出来事をお話しくくださったことが心に残りました。

南相馬市の鹿島区の海のすぐそばには、「鹿島の奇跡の一本松」があります。周りには何もなくて、そこに今まで何があったのか全くわかりませんでした。その中に立っている一本松はとても寂しそ

うに見えました。その一本松にそばで、スタッフさんから震災当日、松林の上に白い雲のようなものが浮いて見えたこと、しかし、それは雲ではなく、迫って来る津波の水しぶきで、それに気づいた人は逃げて助かったこと。逃げるときは、車に乗って猛スピードで山の方に向かい、そのときは震えが止まらなかった、と住民さんの話を聞きました。

この話を聞きながら、一本松を見上げた私は背筋がゾッとしました。高い津波が来たことを想像しただけでも怖いのに、本当に来たら私はダメかもしれない、と思いました。

「おだか ぷらっと ホーム」の廣畑さんは、震災当日のご自身の行動と心の思いをお話ししてくださいました。

「あの日、自分は仕事場にいた。自分は仕事人間だったけれどそのときは、子供のことが気になって仕方なかった。仕事場から家に帰るときに、はじめは近道の海岸の道を行った。でも、その道は渋滞。別の道、6号線は地面が割れていて通れず、仕方なく山側のあぜ道を走った。家に子供がいたときは本当に本当に嬉しかった。」 こう、目に涙を浮かべながらお話しされた姿が、とても印象に残っています。また、「嫌なことが、これからあるかもしれないけど、それはいつか良いことにつながる。何かを一生懸命続けて達成できれば絶対に良いことがあるから頑張ってみよう。」とも話されました。私は、「心の底から頑張ってみよう」という気持ちになりました。「はい」という返事の声が出てきました。帰り際、廣畑さんの笑顔を見て、つられて私も笑顔になっていました。すごく強く、暖かい力で背中を押されている気分でした。

そして、ベースでも震災当日の話になりました。ある人は、東京で帰宅難民になったこと、また別の人は大阪で揺れを感じて机の下に入った、と言われてました。震源から1,000キロメートル以上も離れている大阪でも揺れを感じるぐらい地震が大きかったことを改めて思いました。

地震を体験した人から直接話を聞くことに意味があると私は思います。伝え聞きでは伝わらない表情や身ぶりや手ぶり、言葉の強弱などが私の心に響きました。

ボランティアに行くと、いつも大きな勇気をもらいます。参加させていただきありがとうございました。

## 福島ボランティア体験記 吉永 ちひろ 防府教会

3月29日から4月2日の5日間、福島県南相馬市を拠点に、私にとって6回目となる東日本大震災復興支援ボランティアに参加させてもらいました。

今回の活動は、社協の方と一緒に竹を切ったり、枯れた葉を集めてトン袋（廃棄物を1トン入れる袋）に詰めたり、宿泊したベースのスタッフの南原さんから放射能の知識を教えてくださいました。

以前行かせてもらった岩手県大槌町と福島の違いは放射能です。大槌は、海や川に近いので被害が大きく、あまり工事は進んでいませんでしたが、工事が進めば道路や建物は修復されます。それに対して、福島は放射能の被害によって家や学校は残っていても地元に戻れない方がたくさんいます。また、作業や工事ができないところがあります。放射性物質の中でも、1年半～2年が半減期で今はもうなくなってしまった物質もありますが、半減期が60年や100年以上と言われているような物質もあります。震災・原発事故から6年経った今でもまだ放射性物質が消えず、福島の方々は生活に苦労されています。

福島に行かせてもらい、私が驚いたことは、宿泊したベースにグランドピアノがあったこと、ベースのスタッフさんに音楽大学出身の方が2人もおられたこと、ベースの隣の教会にパイプオルガンがあったことです。夜にスタッフの方が、ピアノとギターで演奏してコンサートをされました。私達も2日目の夜に、そのピアノとギターに合わせて『ビリーブ』と、誕生日だったスタッフの山田さんが作詞・作曲された『この時 この日を この命を』を歌わせてもらいました。その時、ここでも音楽は人の心を癒してくれる、現地の方の心の拠り所や支えになっている、と思い、音楽が持つ力に感激しました。その翌日、私はパイプオルガンも伴奏したかったのですが、知っている曲もなく、楽譜もシューズも持ってきていなかったので、弾けなくてとても残念でした。いつの日か3年前に東北復興に向けた祈りを込めて作った曲をエレクトーン（電子オルガン）で演奏し、東北の方に聴いていただけたら、と願っています。

最後に感謝の気持ちを書きます。福島に行かせてもらい新聞やテレビのニュースだけでは得られない貴重な体験をさせてもらえるのは、教会の方々、家族、支えてくださったみなさまのおかげです。この体験は将来の道しるべになりました。今から始まる高校生活に活かしていきます。本当にありがとうございました。

**「2017春季東北ボランティア福島 南相馬」を終えて 山口教会 瀬川憲昭**  
昨年までこの季節（春）は、岩手の大槌の方へ行っていたが、今回は柴田神父様の意向で、昨年未新しく出来た福島のカリタス南相馬をベースに活動する事になった。ここは、食事等は、シスターたちが全部お世話して下さい、設備も新しく機能的に造られており、お陰様で4日間、快適に過ごす事が出来ました。

福島から山越をして相馬に入るのは、今回で4回目になると思うが、今回は往復ともバスを利用した移動で、高い位置から周囲をじっくり眺める事が出来ました。目に見えない放射能と闘いながら、町を分断され、村を分断され、自分たちが生活していた住居を、強制的に追われた飯館村をはじめとする関係市町村のうち、今回部分的に「避難指示解除」を受けて自宅に戻れる地域が出来た事、そして、我々が訪問期間中、4/1にJR常磐線「仙台～浪江」間が開通を迎えた事は、嬉しい事実であった。

然しながら、地元の方にとってのこの6年間は、本当に待ちに待った長い長い6年ではなかったか…。未憎悪の大地震、大津波、放射能汚染という三重苦の中から、元の状態に戻すのは並大抵の事ではない。ほんの少しの区域の復興に、どれだけの年月、経済力、機械力、人力が投資されたか考えて見ただけでも、さらに全体となると・・・これからも大変気がかりだ。専門家に任せ、少しずつ、確実に復興目指して進んでもらいたい。前述の山越えの際、通って感じた事は、あの黒いトン袋（フレコンパック）が、2年前は山の中腹辺の人目に着かない場所に金属製の塀に囲まれて隠す様に置かれてあった。それが、去年は極端に云えば、福島市街を抜け、山道に入って田畑がある部分の殆どが黒い袋の山状態になった。「これだけ沢山、除染作業をしましたよ」という結果でもある様に積まれていた。そして今年は、保管場所が別の所で指定されたのか、今迄あちこちの田畑に山と積まれていた袋は、部分的に集積され緑のシートに覆われ、それ以外の田畑は整地されていた。多分置き場としての契約期間が来て、返却する状態に在ったのかもしれない。ただ、田んぼとして今迄と同じ稲が育つか心配だ。

さて、今回のボランティアは主に屋外作業が中心で、場所柄少しでも周囲の線量を下げる事を目的とした作業だったと思う。勿論、現場での線量は事前にチェックされ安全を確認された上で作業に入るの、全く心配はなかったが、特に女性軍は2日間、場所、内容は違って、体力的にはかなりハードではなかったかと心配した。そんな中、本当によく頑張りました。ご苦労様！

周囲を見渡すと、やはり同じ様に竹や大小種々の木が刈り取られ、山肌がもろに見える状態で、明るくは感じられるが、ここまで伐採、除去しないと線量を下げられないのかと、日頃、木々の枝葉から酸素を供給してくれている自然に対して申し訳ない気持ちが湧いた。同時に、人体への影響を少しでも減らそうとする気持ちが複雑に交差する作業であった。しかしこれは民家に近い部分に限定され、そこから離れた所は手つかずの状態、本当に見えない物への対処方法がいかに困難な事か、どれだけ人手を要するか？ 身をもって実感した次第だ。

話は前述の「浪江駅」に戻る。今迄無人の町の駅、「浪江駅」に4/1の開通の前日に寄った。昨年は1つ前の「小高駅」までが開通して、今回めでたく「浪江駅」が仙台と繋がった。そのことでどれほどの恩恵を受けられるかだが、この日は開通を祝うノボリが立ち、人の往来も多く、昨年まで見たゴーストタウン状態の町から少しは活気を感じられる街になった気がする。既に解体され更地になった酒屋さん、メガネ屋さん、居酒屋さん、初めて来た時の光景が思い出される。当時バス停には、2台のマイクロバスも置きっ放しにしてあり、自転車置き場にも多くの自転車が放置してあった。全く人気の無い道路で信号機だけが、点滅を繰り返していたのが、印象的だった。

もう1つ、印象的な光景を思い出すと国道6号線を南下して、富岡町方面に向かって行く際に見た道路と海岸線の間には張りつめられたソーラーパネルだ。一体、何枚くらい設置されてあるのか？ と思うくらい、大量のパネル群であった。これは、多くの海水を被り田畑に戻すのは困難なため、宅地にもできないため、有効に何か使える手立てはないか？ と考えられた結果だと思う。

この地域だけでなく、他の多くの箇所で見られ集光発電、電力供給を考えるととても有効な方法だと考える。

今回の第1原発を中心に周辺の地域の視察をしたが、地域の差こそ有るものの道路なり、住宅なり少しずつではあるが、戻りつつある感じは受けた。しかし「帰還困難区域」にある住宅、店舗の前に設置されているバリケードがすごく場違いな冷たい感じがした。また、これらが撤去されるのはいつの日になるのだろうか？ と、思いをめぐらせた。

原発のすぐ近くを走る国道6号線、この路線の線量は昨年通行許可を取って走った時と比べると、数値的には、かなり下がっているのが安心したが、まだまだだ。1日も早く基準以下に戻る事を願って止まない。今回のボランティアで費やした時間はトータルしても僅かな時間ではあったが、直接自分たちの働いた力が地元の人役に立てた、と実感できたボランティアだった。

## 東北ボランティアに参加して 徳山教会 松田祐子

福島駅から南相馬に向かう車窓から、とてもたくさんフレコンバックが積まれているのを見ました。それは、田畑だったと思われるところや、民家の近くにもありました。福島では、まだ何も終わっていない、と改めて思い知らされました。

震災から6年が経過し、ニュースやテレビ番組でもそれが取り上げられることはだんだんと少なくなりました。あの津波による大きな災害や、原発事故の被害さえも、少しずつ、私の記憶からは

薄れていました。時折、鉄道の開通や避難指示解除の報道を耳にすると、復興は順調に確実に進んでいる、と思っていました。しかし実際、現地に足を運んで、私が見て感じたことは、それとは大きくかけ離れたものでした。

視察で、津波の被害の大きかった富岡町の請戸小学校にも行きましたが、周辺には廃棄物の処理場や放射能に汚染されたものを焼却した灰を保管する建屋があり、住宅地の面影は皆無でした。再びこの小学校で子供たちの声を聞くことができる日が来るのでしょうか。

ボランティアへの参加を決めてから、福島で私に何ができるのか。特別な資格も知識もない私が、何か役に立てるのだろうか。と考えていました。実際、社会福祉協議会の紹介の作業では、資格がないとチェーンソーなどの機械を使うことができず、その日向かった先での、竹林の伐採とその枝の片づけでは、チェーンソーの資格をお持ちの方のおかげで仕事ははかどりました。私がやったことといえば、僅かなことです。でも、みんなで協力して竹を片付たり、分担して作業をしていくにつれて、無力な私も福島での働きの一部を担えているのでは、と思えるようになり、本当に来て良かったと、作業は喜びで終わりました。

私に何ができるのか、と考えていたもうひとつの理由に、合理的な方法で、組織の大きな力の関与が、何より復興への近道ではないか、という思いがありました。しかし、福島に来て、もちろんそれも必要なことではあるけれども、目の前のことに私が関わり、働き、痛みを共に感じることで、そして、ここに来ることができなかつた人に福島の現状を伝えることが、何より大切なことだと感じるようになりました。

山口県に戻り数日後、出張のために乗った新幹線の中で、「南相馬の小学校で入学式」のいうニュースが流れるのを見ました。新入生頑張っ！保護者の方頑張っ！と心の中で叫びました。遠くに住んではいますが、いつも応援したい、寄り添いたい、そう思っています。

このボランティアを計画していただいた柴田神父様、そして私たちをあたたく迎えてくださり、お世話をしてくださった原町ベースのシスター方やスタッフの皆様にご心から感謝しています。

ありがとうございました。

## 福島ボランティアを体験して 徳山教会 柴田 潔 (イエズス会)

2011年12月から始まったグループでの東北ボランティアは17回目、避難指示が解除されていくこの時期に初めてカリタス南相馬ベースを拠点に活動しました。政府は、住環境が整いつつある、として浪江町・飯館村・富岡町などの避難を解除しました。けれども、6年の間に家が劣化して住めない、低線量被爆の心配があり医療機関も不備がある、学校・店舗も以前と同じではない、事故後の原発の状況が不安定でまだ何が起こるかわからない、などの理由から戻る人は1割から2割です。

南相馬のベースに行く前に、これまでに何度か訪問した桜の聖母の学童サークル“星の子クラブ”のために恐竜の着ぐるみを用意しました。着ぐるみに入って恐竜を演じたベトナムの神学生も楽しんでくれたようだし、子供たちの目が輝いていて私も嬉しくなりました。後日、恐竜の絵入りのお

礼のお手紙をいただき宝物になっています。また、年末にホームステイでお世話になった氏家さんが、わざわざ南相馬までお土産と激励の品々を届けてくださり感激しました。このような、結びつきができてくるのも、東北ボランティアの神様からの恵みです。

活動初日、他の参加者が視察をしている日に、私は人手が足りていない原町さゆり幼稚園の春休みの預かり保育を手伝いました。この幼稚園は、私が園長をしている小さき花幼稚園が支援させていただいて、幼稚園からの寄せ書きと手作りコースター、徳山教会の皆さんから頂いた義援金をお渡ししました。まずびっくりしたのは、部屋の中を自転車でビュンビュン飛ばしていたことです。放射能が心配で、外遊びが十分できないためなののでしょうか？他にも、遊び道具の取り合いになって手が出てしまったり、心無い言葉が飛び交ったり・・・いつも幼稚園では優しい言葉が溢れているのとは比べて心が痛みました。原発事故の影響で先生も不足し、保護者もお子さんに手が回ってないのでしょうか？戸惑いながら時間を過ごし、最後に恐竜の着ぐるみで楽しんでもらいました。すると、迎えに来たお母さんに「今日は恐竜が来たよ！怖かった！」と興奮して話していました。この時は、子どもたちの柔らかい心を感じて嬉しくなりました。活動二日目は竹林伐採でした。これまでも何度か、庭木の伐採などしてきましたが、幅広い年齢の今回のグループで、楽しく作業することができました。

私は、教会の総会が日曜日にあるため、わずか2日しか活動ができませんでした。南相馬には、原町ベースの頃を合わせて7~8回来ています。そのために、ある意味、新鮮さは感じにくくもなっています。それでも、足を運ぶと現実を知ることができるし、何よりも参加者が自分の感性で現実を掴んでくださっています。今回も、みなさんの体験談を読みながら計画してよかったと感じました。ただ、福島に若い人を引率することへの心配や疑問の声もあります。私としては、原発事故の影響を肌で感じ、また、事故後も頑張っておられる現地の方に出会って何かを感じて欲しい、という思いです。遠くから「どうなんだろう？」と傍観するのではなく、福島に行って隣人になれたらと思っています。他に、何か支援の良い方法があったら教えていただきたい、気持ちです。「福島の方々のために何ができるのか？」という思いです。これからも、同じ思いでしょう。次の機会に、また南相馬に伺えたらと願っています。今回も、ベースの皆さんに大変お世話になりました。本当にありがとうございました。